

経済調査は経済実態をスケッチするようなもの

第一生命経済研究所 特別顧問 山口 公生

経済調査は絵画のスケッチに似ているが

私は経済調査の中身について語るほどの経験も知識もないが、印象では絵画におけるスケッチに似ている面があるように感じる。まず、その対象となる実物をよく見てからでないとうまく描けないという点である。安野光雅画伯が書かれた「絵の教室」という本に、例えば「山の稜線を想像だけで描いてください」という問題がある。これが簡単なようではなかなか難しい。

画伯がここで言われたいことは、「経験者でも、実物を良く見ないと錯覚に陥りがちである。漫然と見ていたのではだめ。」ということのようだ。これはまさに経済調査のあり方にも当てはまることではないだろうか。経済実態をよく見て観察しなければ、錯覚にとらわれた経済調査になりかねない。経済実態という事実即して正しいイメージを作り上げ、それを適切に表現するのでなければ、本当の経済調査とは言いがたい。

ただ、ここでの最大の問題は対象となる経済活動が大きすぎて見えないし、複雑すぎてとても全体を把握することも不可能であるという点にある。グローバル化した経済ではなおさら把握が困難となっている。この点については、経済実態を最大限広くかつ深く見る努力を尽くしたうえで、それでも限界があることを認識し、出した結論にも謙虚さを失わないようにするしかないと思う。

また、頼りとする経済データについても、すでに過去のものであること、質的な要素が不足していることなど、その限界についても自覚しておくことが大切となる。また、山の稜線をスケッチするのは異なり、対象が日々動いているということも経済調査を一層難しいものにしていく。

イメージを言語で表現することの難しさ

さらに調査した内容を踏まえ、それを経済評論

やレポートの形に表す時にも絵画のスケッチとはまた違った難しさが存在する。スケッチでは自由に線を入れたり、色を塗ったり、濃淡をつけたり、いろいろな表現方法で微妙な違いを表すことができる。しかし、経済調査では言葉や図表でしか表現できない。このため、微妙な違いを示すことが難しいうえに、受け手に誤ったイメージで理解されることもある。

言語や図表に主観が入り込むのは避けられない。書き手は何を強調するか、何を捨象するか、を自分なりに決めることとなるので、絵画と同じく、言葉や図表（データの使い方を含め）で書かれたものにも個性が出てくる。その人の個性の背景には経済社会に対する見方、考え方がある。「こういう経済社会が望ましい」という価値観にも繋がるものである。これは自分では気がつきにくい点かもしれない。その意味では背後にしっかりとした考えがないと、事象に流され、騒ぎ立てるだけ、あるいは批判するだけの論述にならないとも限らない。独りよがりの乱雑な絵画のようなものである。

他方、客観的であれば、経済についていろいろな見方や考え方があってよいし、むしろそれが自然と考えるべきではないか。他人の経済調査にも敬意を払う気持ちが大切である。

経済調査は誰のためのものか、また何のためのものか

経済調査は誰のものであるかを、常に自覚しておく必要がある。当然それを求めている例えば経営者、資産の運用を考えている者、経済の先行きを懸念している人などである。その点、自己のため、客観性を無視した「ためにする断言」は経済調査をベースとしたものの範囲を逸脱しているおそれがある。地道な経済調査を基としている以上、

敢えて目立つ表現をとることは避けるほうが賢明であろう。

単なる予言をすることや、数字を的中させることが経済調査の目的ではない。時にその片言隻句がミスリードしてしまうこともあるし、意図せざる形で利用されることすらある。大切なことは、経済調査の結果を聞きたい、読みたいという人が何を求めているのか、を察知することではないか。なぜならば、最終的に経済調査はそれを求めている人の判断に役立ててもらわなければならないからである。

自戒の念もこめて言えば、「経済調査というスケッチに最後の筆を入れるのは情報の受け手である」ことを忘れないようにしたい。